

交換留学報告書

* この報告書に記載される内容は多文化社会学部のウェブサイト等に記載いたしますので、予めご了承ください。

氏名	岡田咲	学年(渡航時)	4年生
派遣先大学	ウェスタンシドニー大学		
国・地域	オーストラリア		
派遣期間	2025年2月	～	2025年12月

履修科目

1学期目	
履修科目	授業内容
BEHV1021: The Individual in Society	人間の行動を総体的に理解するため、人間性・生態・行動・認知・学習・社会文化などについて理論的に学ぶ。また、自己・態度・従属・偏見・対人関係などのテーマを社会心理学を用いて分析し、日常生活や現代社会とのつながり及び応用について考える。 キーワード:社会心理学、人類生態学
CULT1017: Understanding Society	社会学の基本概念・理論・方法を学び、個人の経験と社会構造とのつながりについて考える。主に権力・構造・社会的不平等などをテーマとして扱い、過去から現在にかけての社会問題を社会学的に読み解く力を身に付ける。 キーワード:政治社会学、社会学理論
WELF2002: Community Work & Development	「コミュニティ」という概念の社会的役割や立場について理解し、コミュニティワークの価値や目的、前提を学ぶ。地域・国家・国際レベルでのコミュニティ活動を幅広く取り扱い、環境・政治・経済・文化など実践に関わる要素を理解する。 キーワード:社会福祉学、都市社会学、地域福祉
WELF3021: Disability Rights, Policy and Governance	障害者権利条約(障害者の権利に関する条約)以降の、障害者に関する法律・政策・支援の変化の流れについて学ぶ。この条約が社会サービスや制度に与えた影響について批判的に検討し、また事例研究を通して実際の制度や支援にどの反映されているのかを考える。 キーワード:社会福祉学、障害者福祉
2学期目	
履修科目	授業内容
HUMN2025: Families and Intimate Life	家族や親密な関係を社会学的に批判的に考える。人々や社会が「家族」に対して抱いているイメージや固定観念を問い直し、「家族」が文化・経済・政策・技術・グローバル化など社会構造に影響されることを学ぶ。核家族が不平等を再生産してきた側面についても、フェミニズム理論を始めとする様々な社会学理論を用いながら分析する。 キーワード:家族社会学、ジェンダー研究、社会学理論
TEAC1032: The Developing Child	0～12歳までの子どもの発達を取り扱う。身体・感情・認知・言語・道徳・創造性・精神性・学習面などに関して、伝統的なものから最新の脳研究に至るまでの理論・方法論を学ぶ。家族や地域など社会文化の影響も踏まえた上で子どもの発達を総体的に捉える力をつけ、最終的には学んだ理論や方法論を用いて、発達に関するポートフォリオを作成する。 キーワード:教育心理学、教育方法学、発達心理学、社会心理学

WELF1002: Context of Human Services	<p>オーストラリアの政治的環境の中で、ヒューマンサービスがどのような役割を果たしているのかについて学ぶ。市場・政府・コミュニティの役割を批判的に分析し、ソーシャルジャスティス(社会正義)との関連性について考える。学んだ知識を用いて、最終的には政府に対する提言書の作成を行う。</p> <p>キーワード:社会福祉学、地域福祉</p>
WELF1003: Human Services Intervention Strategies	<p>ソーシャルワーク、コミュニティワーク、ユースワーク、国際社会開発の基礎理論を学ぶ。貧困や不平等などへの影響を考えつつ、ヒューマンサービスにおいて必要不可欠な価値観や理論、倫理に対する理解を深める。個人・集団・地域を支援するための初步的な評価・介入スキルを身に付け、理論やチームで働く上でのポイントも学ぶ。</p> <p>キーワード:社会福祉学、倫理綱領(Code of Ethics)</p>

留学レポート(1,500字以上)
<p>国連が毎年発表している世界幸福度報告 2025 によると、2025 年の日本の幸福度ランキング(2022 年から 2024 年の平均評価に基づく)は世界で 55 位でした。平均寿命が世界 2 位であったり、国民一人当たりの GDP のランキングが 28 位であったりするのに対してソーシャルサポートが 48 位、自由度が 79 位、気前の良さ(寛容さ)が 130 位という結果になっています。豊かさの定義は様々ですが、経済規模や医療・健康の面では比較的「豊か」な国であると言える日本と、それでもなお多くの人が不自由さや不公平さ、生きづらさや社会とのつながりに問題を感じているギャップに違和感を覚えたことがきっかけとなりこのオーストラリア留学を決めました。日本と同じように経済や医療・健康の面で豊かな国であると同時に、日本とは異なり世界 11 位という非常に高い幸福度を持つオーストラリアで社会福祉を学ぶことで、日本が抱えている大きなギャップを解消するヒントが得られるのではないかと考えたのです。また、私は卒業後に社会的養護施設(児童養護施設や母子生活支援施設など)で働きたいと考えており、オーストラリアと日本の社会保障制度の比較を通して児童福祉や子ども家庭支援への知識を深めたいという思いもありました。</p>
<p>留学の動機が上記の通りであったため、ウェスタンシドニー大学では School of Social Sciences の中でも Bachelor of Social Work が指定する科目を取るようにしていました。Autumn Semester では、社会心理学の視点から「個の集合体としての社会」と、政治社会学の視点から「構造としての社会」を学びました。更にその「社会」の中で「コミュニティ」がどのような役割を持っているのかについて学ぶと共に、オーストラリアにおける障害者福祉(特に法律と政策)の変遷についても学びました。社会心理学と政治社会学の授業は School of Social Sciences の学生がコース関係なく履修しなければならない基礎的な科目であり、内容も多文化社会学部で学んできたことと重なる部分が多くありました。しかし、コミュニティワークと障害者福祉の授業は基本的な社会学理論は勿論のことオーストラリアの法律や政治制度、社会保障制度への深い理解が求められたため、授業についていくのに非常に苦労しました。また、Autumn Semester で履修した科目は全て Lecture がオンデマンド形式、Tutorial は対面ながらも 2 週間に 1 回しか実施されませんでした。そのため自分一人で試行錯誤しながら勉強するしかなく、勉強の難しさだけでなく精神的にも苦しかった時期でした。</p>
<p>2 学期目である Spring Semester では、日本にいる時から気になっていた家族社会学の授業や卒業後に考えている進路と関係の深い発達心理学の授業、そして専門性の高い社会福祉学の授業を 2 つ取りました。2 学期目は毎週対面の Tutorial があったことで授業内容は 1 学期目より難しかったものの、1 学期よりも遙かに安定した精神状態で大学に通うことができました。4 つの科目の中で特に印象的だったのは、家族社会学の授業とヒューマンサービスの授業でした。家族社会学の授業では授業時間の半分以上がディスカッションに充てられており、予習した内容や今までの知識を用いて論理的に自分の意見を英語で述べるスキルが身に付いただけでなく、様々なバックグラウンドを持った学生たちにとっての「家族(あるいは親密な関係)」という概念に触れることで今までの自分に無かった視点を得ることができました。また、2 学期の始めの頃は発言したいことがあっても、知識の不十分さや言語的な問題で上手くディスカッションに加わることができず悔しい思いをすることがありました。予習復習に今まで以上に力を入れることで自分に不足していた知識や言語力を補うことができました。もう一つ印象的だったのはヒューマンサービスの授業でした。この授業もディスカッションの割合が非常に高く、知識と語学力の両方においてとても勉強になりましたが、それ以上に長期的なグループワークを通じて実際にソーシャルワーカーとして働くイメージをつけることができました。長期グループワークの課題自体は小児認知症をテーマとしたアドボカシープロジェクトの計画だったのですが、その後に個人課題として「グループワークがどのように行</p>

われたのか」についてのレポートが課されました。これは単なるグループワークの感想ではなく、グループワークが具体的にどのように行われたのか(人間関係の変化や具体的な発言内容、グループワークで用いたアプローチ方法など)、倫理綱領や倫理的ジレンマに対してどのように対応したのかなどについて理論や方法論を用いて全て丁寧に説明しなければなりませんでした。ヒューマンサービスは文字通り「対人サービス」であり、明らかな正解が存在しない世界で「より正解に近い何か」を考え続けなければならない分野だと教わりました。常にグレーの世界だからこそ過程を丁寧に行うこと、そして丁寧に行うためには知識とスキルが必要不可欠なのです。特にオーストラリアは多文化主義国家であり、ヒューマンサービス分野において想定される倫理的ジレンマの数の多さに驚きました。外国籍や外国にルーツを持つ人が増えている日本にとってこれは決して他人事ではなく、多文化に応じたヒューマンサービスの在り方について改めて深く考えることができました。

「オーストラリアで何が学びたいのか」をはっきりさせた状態で留学準備を行い、上限まで取った8科目全てが自分の興味のある分野に関連していたので、最初から最後までモチベーションを保ったまま勉強に集中することができました。しかし、これは決して私自身の力だけではなく、むしろ周りにいた人々、特にフラットメイトたちが支えてくれたおかげだったと強く感じています。私は大学の寮で7人のフラットメイトたちと共同生活をしていたのですが、国籍も文化も年齢も異なる女の子たちと毎日生活を共にする中で、何度もカルチャーショックや価値観の違いによるすれ違いを経験しました。しかし驚くべきことに、私たちのフラットメイトは誰一人として「対話による理解」と「相手の文化への尊重」を疎かにすることなく、問題が発生した場合には必ず対話と思いやりを持って解決する努力をしてきました。この努力は絆へとつながり、私たちは毎月のように何かしらのイベント(バースデーパーティーや旅行、ムービーナイトなど)をフラット内で企画するようになったり、嬉しい時も悲しい時も自分の気持ちを話せる間柄になることができました。知り合いのいない土地でこのような安心できる環境と人間関係を獲得できたことは、オーストラリアでの留学生活の中で一番の幸運でした。対面での授業が殆どなく、精神的に苦しかった最初の学期を乗り越えることができたのもこの環境のおかげです。また、フラットメイトたちとの良好な関係は精神的な面だけではなく学びの面でも大きな役割を果たしていました。彼女たちと強い信頼関係を築くことができたからこそ、安心して政治や文化、自分たちが経験してきたことや将来について共有し合うことができました。寮生活の中で行われた数えきれない程の雑談や議論は、他文化への理解や社会問題に対する新たな視点に気付かせてくれました。

留学前に、「インターネットを使えば世界中の情報を一瞬にして得ることができる時代にわざわざオーストラリアに行って、オーストラリアの社会福祉を学ぶことに意味はあるのか」と聞かれたことがあります。その時は「知らない誰かが体験したことを見て得る知識と実際に自分が体験して得る知識は必ずしも一致しないから、実際に行くことには十分意味があると信じている」と答えた気がしますが、正直なところ、留学前も留学中もずっとこの問い合わせ頭の片隅にありました。たった11か月。それはとても短い時間で、毎日必死に勉強したものの私はオーストラリアという大きな国ほんの一部しか知ることができなかつた気がします。しかし、実際にオーストラリアで11か月間生活したからこそ知ることができた、教科書には載っていないオーストラリアの社会通念や、日本のニュースでは報道されない問題や事件、現地の人々の口から語られる歴史や文化が確かにありました。そして、そのような「目に見えるもの」と「目に見えないもの」の両方によってオーストラリアの社会は構成されており、社会保障制度をはじめとする様々な仕組みもまた、それらを土台として成り立っているのです。この留学で学んだ知識と得た経験だけでオーストラリアの幸福度や社会の全てについて語ることはできないものの、手掛かりを得ることはできました。学びも経験も出会いも試練も全てひつくるめて、私にとっては間違いない「意味のある」1年間でした。

留学中の写真(5枚程度) ※写真のキャプションも入れること



大学手前の歩道橋から見える自然豊かなキャンパス。
履修した8科目全てパラマタサウスキャンパスで授業が
行われた。



冬休み中にフラットメイトたちと行った3泊4日の
ブリスベン・ゴールドコースト旅行。



どんな交通系 IC でも基本的に全国どこでも使える日本とは
異なり、オーストラリアは州ごと。写真はブリスベンやゴールド
コーストがあるクイーンズランド州の Go Card。ニューサウス
ウェールズ州よりも遙かに電車代が安くてびっくり。



フラットメイトたちが22歳のお誕生日をお祝いしてくれた(7月)。
真冬の誕生日は初めて。



インド出身のフラットメイトおすすめのインド映画をリビングで鑑賞中。映画で盛り上がるポイントは万国共通。